たらちねの

札幌市医師会
新札幌パウロ病院
高階　俊光

テレビで「母の子への思い」という番組を見ました。そしてすぐに親父から聞いた軍隊時代のお話を思い出しました。

ある時、戦場で親父と戦友の２人は敵に囲まれて孤立して四面楚歌になりました。いろいろな手立てを試みたのですが、どうにもならなく途方に暮れ、精根尽きてへたり込み、もうダメだと死を覚悟しました。そうしているうちに次のことが起こったのです。暗闇の中で戦友が「あぁ、お袋だ！」と小声で叫んだのです。遠くに戦友の亡き母親が提灯（ちょうちん）を持って現れたのだそうです。２人は立ち上がり戦友が「あそこだ、あそこ！」と指をさしましたが、親父には全く見えませんでした。親父はつまずきながらもそうっと提灯を持った母親を追う戦友についていきました。どのくらい歩いたか分かりません。突然戦友は提灯と共に母親の姿がぱっと消えて見えなくなったと親父の方を振り返って口走ったのでした。唖然とした２人はどうしたものかと改めて恐る恐る周囲を見渡すと、そこは何と味方の陣地だったのです。戦友の母親は息子の無事と安全を確認して提灯を消して天に戻っていったのでしょうか。この話は子供の時から何度も聞かされていました。それにはまた後日談が待っていました。それから終戦後30年以上の歳月が流れ、親父はたまたま知った戦友の会に出席しました。そこで何とその戦友と再会したのです。親父はその戦友との再会を信じられないと連発し、大人になった私に何度も何度も臨場感を込めてお話ししたものです。戦友は戦後ラジオで親父のことを５年以上にわたって探していたそうです。この戦友にとっては幻ではなかったでしょう。親父にとっては戦友と共に体験した現実にあった話です。亡くなっても子を想い、戦友の母親は我が子を心配して提灯を持って舞い降りてくれたのでしょうか。科学がいくら進み発達した時代にあっても信じられないことが起こるのですね。

旅情ミステリー作家の内田康夫さんの作品、浅見光彦シリーズをテレビで見て（姫島殺人事件より）、吉田松陰が処刑される直前の辞世の歌「吉田松陰歌碑」が出てきて、その歌碑の内容は、自分はどんなに親を思っても親はそれ以上に子供のことを思うものだという歌だそうです。そして番組の浅見光彦さんのお母さんの言葉は『お父さんもお母さんもあなたのそばにいるからね、一緒にいるからね。親の気持ちは亡くなった後もずっと子供のことを思っているの。子を思う気持ちだけはずっとずっといつまでもあなたのそばに残っていますからね』と言っていました。まさに親父の体験を物語っているかのようです。

また別のテレビの番組で、ミャンマーから日本に難民としてやってきた人の話を見ました。その難民の両親はミャンマーに残りました。両親は自分たちはともかく、息子や娘たちの将来が少しでも良くなったらこの上ないと言って息子や娘の家族を日本に送り出しました。そしてまた日本にやって来た息子や娘たちは、自分たちはどうなってもいいから自分の子供たちが日本で幸せになったら何も言うことはないとインタビューに答えていました。ミャンマーの残った両親は息子や娘たち、そして孫たちの幸せを願ったのです。目に涙が浮かんで染みてしまいました。

動物番組では、カナダ・ハドソン湾のホッキョクグマの親子愛を見ました。まだ海にも行けず、氷が張る日を待つ母と子、氷が張らないとアザラシが獲れない母親は自らの空腹に耐えながら子グマにお乳を与えます。母親は常に子供のそばに寄り添い、どんな小さな危険も見逃しません。そして自分が犠牲となって手本になり、辛い季節の過ごし方を教えていくのです。

これらの映像から、母の子への愛は人間も動物も変わらないものと実感しました。人生という航海にどんな荒波が待ち受けているかもしれませんが、親はいつでも子供のことを思っているのです。朽ち果てても寄り添って見守っているのです。

私もご先祖様が身近になった歳になりましたが、今でも母親に子供扱いされています。80歳を超え、献体に登録している元気すぎる母に負けないように「母さん、献体はいいことだから早くした方がいいよ」「もういい年だから身体にいいものは何も食べなくていいよ」とか「血液検査でどこも異常がないって？　それが一番困る」などと憎まれ口を叩いています。現在は急性期病院を離れて慢性期病院に勤務していますが、ご高齢の女性が認知症になって夫の声と顔を忘れても、子供のことは覚えている多くの事例を経験しています。「母の子への思い」を改めて実感しているこの頃です。